
バレンタイン・デイ～先生との約束～

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン・デイ先生との約束

【Nコード】

N3736A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

ぼく、樋口海斗^{ひぐちかいと}5才5ヶ月のさくら幼稚園桃組……おませな海斗と麻美先生のパレンタイン・デイのお話です。

前編

ぼく、樋口海斗ひぐちかいと5才5ヶ月のさくら幼稚園桃組。

ぼくの通う幼稚園は、赤組、桃組、緑組に分けられている。赤組は4歳児の年少組、緑組は6歳児の年長組。ぼくの桃組は中間つとこ。緑組は今年の春から小学生。だから、ちよつとばかり生意気なんだよね。もうすぐ小学生、大人の仲間入りって顔で、幼稚園児のことをバカにする奴もいるんだ。でも、ぼくから見ればまだまだガキだね。お漏らししたり、転んで泣き出したり、滑り台の順番がなかなか回ってこないってだだこねたりする奴もいるんだ。

その点ぼくは大人だね。

ママの送り迎えがなくても、一人で幼稚園の送迎バスに乗れる。滑り台の順番だって譲ってやってる。泣いてる子を見たら慰めてあげるし、お漏らしをよくする子は気をつけて、一緒にトイレに連れてってあげる。

ぼくはいい子だ。その上かわいい。色が白くて、おめめがパッチリしてて、まつげがすごく長い。よく女の子に間違えられたりするけど、そこいらの女の子よりぼくの方が断然かわいいね。

当然、女の子には大人気。何にもいわなくても、あっちから寄ってくる。5ヶ月前のぼくの誕生日には、プレゼントの山だった。女の子だけじゃなくて、男の子にも人気があるから、桃組全員からプレゼントをもらった。赤組のチビっ子達や、緑組のお姉さんお兄さんからもたくさんもらった。毎年、家の誕生会は芸能人並の華やさだ。

ちよつと疲れた。モテるのも大変だ。

幼稚園の先生達からも、プレゼントをもらった。幼稚園では毎月その月の誕生日の子達のために誕生会を開く。その時、ささやかな

プレゼントをもらっただけ、ぼくはそのプレゼントとは別に豪華なプレゼントももらった。

いわゆる、えこひいきってやつ？

うちの幼稚園には、女の先生が三人と女の園長先生が一人いる。幼稚園の先生って大人なのに、園児と一緒に遊んだり園児レベルで会話したりしなきゃいけないから大変だと思う。園長先生なんて、ぼくのおばあちゃんより年上のはずだけど、ぼく達と一緒に『大きな栗の木の下で』って大きな口開けて歌いながら踊ったりするんだ。仕事とはいえ、よくやると思う。5才のぼくだってあの幼稚いお遊戯は恥ずかしくなるっていうのに。感心感心。

クリスマスには園長先生を含めた4人の先生からプレゼントを貰った。

「みんなには内緒よ」

と言って、先生達はぼくにプレゼントをくれる。

「はい、ありがとうございます！」

ぼくは満面に天使の笑みを浮かべて、プレゼントを受け取る。もちろん、他の奴らにチクルつもりはない。プレゼントはいくつもらっても嬉しい。中味はどうであれ……。

よくもらうのは「ぬいぐるみ」。毎年ぬいぐるみ屋が開けるんじゃないかと思うくらい、どつとぬいぐるみが集まる。本当は興味ないんだけど。ぼくはいつももらってすぐ嬉しそうな顔をする。でもって、そのぬいぐるみ達の運命は、次の誰かの誕生日用のプレゼントとなる。ぬいぐるみのリサイクル。物は大事にしなきゃね。くれぐれも、貰った人に渡さないよう細心の注意が必要だ。誰からもらったのかちゃんと紙に書いて、その紙をテープでとめてぬいぐるみに貼り付けておく。

ぼくって結構几帳面。

桃組の担当は、矢野麻美^{やのあさみ}っていう女の先生だ。担当ってことで、特にぼくを可愛がってくれる。茶色に染めた長い髪をおさげにしてリボンでとめている。幼稚園の先生だから、子供に合わせてかわいく見せようと思っているんだ。

麻美先生の年は知らないけれど、もう随分長く幼稚園で働いているらしい。お下げ髪に無理があるような気がする。一度、考えのない奴が先生に年を聞いた。

「せんせいは、なんさい？」

麻美先生の笑顔がひきつったのが分かった。

「うーん、何歳かなあ？ 先生、忘れちゃった」

首を傾げる先生に、そいつは「えーっ？」といってしつこく聞いた。ぼくのフォローがなけりゃ、麻美先生マジで切れていたと思う。

「先生はきつと二十歳だよ！」

ぼくは先生を見上げてニッコリと笑った。麻美先生は心からの笑顔で、ぼくの頭を何度もなでてくれた。麻美先生、分かりやすい。園児の母親には、小学校を卒業するまで25才から年を取らなかったというママもいるそうだから、女性に年を聞くのはやばいんだと思う。

ぼくは結構麻美先生が好きだ。顔はそれ程美人じゃないし、胸もないけど、いつも一生懸命で優しい。ドジでよく失敗するところもかわいと思う。それに先生のプレゼントはいつもとびきり豪華で、ぼくの欲しいと思ってたものを選んでくれる。クリスマスプレゼントで貰った48色入りのクレパスも気に入った。

いつもワンテンポずれてる天然ボケキャラの麻美先生だけど、去年のクリスマスあたりは元気がなかった。先生には今のところ彼氏がないらしい。赤組の桃香先生や緑組の愛先生には、ちゃんと彼氏がいる。ぼくの見たところ、桃香先生も愛先生も麻美先生よりはか

なり年下だと思う。桃香先生は去年の春先生になったばかりだ。

そんな年下の先生達の幸せそうな顔を見るのが、麻美先生は辛かったんだと思う。どうやら一人暮らしをしている麻美先生は、クリスマスの三連休はずっと家にいたらしい。麻美先生が園長先生に、三連休はずっとレンタルビデオを観ていた、と話していたのをぼくは聞いた。大人もいろいろ大変だね。

そんな麻美先生がお正月開けて幼稚園が始まった頃から、急に変わった。なんていうか、生き生きしてる？ 前より明るくなって綺麗になってきたと思う。

ぼくのカンだと、あれは恋してる顔だね。

麻美先生は冬休みの間、故郷の実家に帰っていた。もしかしたら、お正月に新しい出会いがあったとか？ お正月の同窓会っていうので、昔の好きな人に再会したとか？ 色々想像できるけど、とにかく麻美先生に好きな人ができたのは間違いなかった。

なぜなら、先生はもうすぐ訪れるバレンタインデイのことをとっても楽しみにしているみたいだから。去年のバレンタインの時は、クリスマスの時みたいに元気なかった。彼氏のいない女の人にとって、クリスマスやらバレンタインは辛いものらしいね。

なぜかな？ 5才のぼくにとってはどっちも楽しいイベントだ。彼氏だの彼女だの関係ないよ。まあ、イベントのたびにぼくは数え切れないくらいプレゼントやチョコレートをもらっちゃうんだけどね。

今年のバレンタインもチョコレートの山に囲まれるんだろうなあ。チョコは嫌いじゃないけど、あれだけたくさんチョコはとても食べきれない。ホワイトデイのお返しだって大変なんだから。それでクリスマスプレゼントの時みたいに、チョコレートをホワイトデイ用にとっておくんだ。ママがちゃんとラッピングし直してくれるから助かる。

でも、バレンタインのたびにたくさんの女の子たちから、告白さ

れるのって大変だ。素っ気なく断るのはかわいそうだ。だから、ぼくはいつも「ありがとう」って言ってる。

ぼくの年なら付き合う付き合わないってのあまり重要じゃない。みんなとは平等に仲良く付き合ってるさ。その点、大人はややこしいな。付き合う人は一人に決めなきゃいけないらしい。

バレンタインの前の日。いつものようにぼくは麻美先生と残って、お片付けをした。

常にいい子ちゃんでいるためには、先生のお手伝いは欠かせない。

「海斗君は今年もたくさんチョコレートをもろうんだろうね」

大きな積み木のブロックを抱えて麻美先生が言った。

「先生からも手作りのチョコレートあげるからね」
麻美先生は笑顔でそう言う。

「わあ、うれしいな！ ぼく、先生からのチョコレートが一番うれしいや」

ぼくはあどけない天使の笑みを先生に向ける。大抵の大人はこの笑顔でメロメロだ。

「ありがとう。先生、今年はあまりチョコレートを贈らないことにしたのよ」

先生は心底嬉しそうにフフと笑う。

「義理チョコとかやめて、本当に好きな人にしか贈らないことにするわ」

「へえそうなの？ 先生、チョコレート何個贈るの？」

「3個よ。田舎のお父さんと海斗君ともう一つはひみつ……」

先生は少し恥ずかしそうに口ごもる。本当に好きな人の中にぼくが入ってることは、喜ぶべきことかな？ 最後の「ひみつ」の人ってのが、きっと先生の大本命の彼に違いはない。

ぼくがそんなことを考えていると、ガッタン！ ドッテン！ というものすごい音が立て続けにした。ふと見ると、前を歩いていた

麻美先生が大きな積み木ブロックをおっことして、床にしりもちをついていた。麻美先生っていつも何にもないところでつまずいたりするんだよね。

「先生！ 大丈夫！？」

ぼくはすぐに麻美先生のところに駆け寄る。先生はお尻をさすりながらゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫よ」

あんなデカイ音立てて転んだから、痛くないはずはない。けど、先生はニコニコ笑顔のまま、積み木を持ち上げた。先生はきつと「ひみつ」の彼のこと考えてぼくとしてたんだ。先生はお尻の痛みなんか忘れるくらい「彼」に夢中なのかも。

後編

そして、バレンタインデイ当日。

日本全国学校や職場でチョココレートの受け渡しが行われる。さくら幼稚園でも朝からみんなソワソワしていた。男の子たちはいつチョコレートがもらえるんだろうかと気になって、遊びも手につかない。女の子たちもお目当ての子に渡すタイミングを狙ってる。

ぼくなんて、渡されなれてるからちっともソワソワしない。

一番最初は幼稚園の送迎バスの中。気が早くてせっかちな子は少しでも早いとこ渡したいらしい。ぼくは予め用意しておいた大きな紙袋の中に次々とチョココレートの包みを入れる。二番目は下駄箱の中。恥ずかしがり屋の女の子からのチョコが何個か入っていた。

そして、三番目は幼稚園のクラス。ぼくの姿を発見すると、女の子たちがいっせいに集まってくる。

「海斗くん、ハッピーバレンタイン！」

美咲ちゃんが、超ミニのスカートをヒラヒラさせながら一番に駆け寄ってくる。美咲ちゃんは桃組のアイドル的存在のかわいい子ちゃんだ。他の男児達は羨ましそうな眼差しでぼくを見てる。美咲ちゃんのミニスカートからかわいいパンツが見え隠れする。今日は真っ赤なハート柄。パンツもバレンタインバージョンだ。美咲ちゃんはいつもパンツをチラチラさせてる。「見せてもいいパンツよ」って言うてるけど、あのパンツは見せてはいけないパンツだと思う。

男児の前で見せる「悩殺パンチラ」攻撃で、桃組不動のナンバーワンアイドルの座を維持している。ぼくもパンチラ嫌いじゃないけど、美咲ちゃんはちよつと子供っぽいよね。

「美咲ちゃん、ありがとう！」

そんなことを考えながらも、ぼくは美咲ちゃんがくれたピンクのリボンで飾られた大きな包みを笑顔で受け取る。

「海斗くん、大好き!」

美咲ちゃんはおまけのプレゼントととして、ぼくのほっぺにブリツとキスしてくれた。隅の男児達の集団から羨望のため息が聞こえる。これ、イケメンの特権。

「海斗君、ぼくの気持ちです。受け取ってください」

美咲ちゃんのチューに気をよくすると、義明くんがぼくにチョコの包みを差し出した。義明くんは男の子なのに、毎年ぼくにチョコをくれるんだ。しかも手作り。これが結構美味しい。

「義明君、ありがとう!」

ぼくが嬉しそうに笑顔を向けると、義明くんも嬉しそうに微笑みかえした。義明くんもかわいい男の子だ。でも、義明くんって女の子より男の子が好きなんだって、という噂をよく聞く。ぼくって女の子よりかわいいけど、義明くん、ちょっとやばくない?

義明くんからもキスされたらいけないから、ぼくはさっさとチョコを紙袋に入れて次の子のところに行った。

アツという間にぼくが持ってきた紙袋はチョコレートでいっぱいになる。すごく重い。去年は底が破けてしまったから、今年は頑丈な袋にしたんだ。

今年も先生達からのチョコもゲットした。先生からのチョコはどのチョコも豪華だ。いわゆるブランドチョコで、ママがとても喜ぶ。滅多に食べることでできないチョコが多いんだって。てわけで、先生のチョコはいつもママのものになるんだ。

麻美先生からもちろん手作りチョコをもらった。

「先生、『ひみつ』の人にはチョコレート渡した?」

送迎バスに乗る前に、ぼくは先生を見上げて聞いた。先生ははにかみながらニコリと笑う。

「まだ。幼稚園のお仕事の後に渡すのよ」

「先生、がんばってね!」

ぼくはめいっぱいの笑顔を向けて、先生に手を振る。

「うん、がんばるね！」

先生もぼくに手を振る。麻美先生が、年下の女の子みたいに見えた。恋してる女の人ってすごくかわいくなるんだね。

夕ご飯の後、ぼくはママと一緒に愛犬ララの散歩に行った。ララは雌のゴールデンレトリバー。すっごくデカイ。ぼくは時々ララの背中に乗って遊んだりする。おっきいけど、とても大人しくて人なっつこいんだ。

ララは今夜も息を切らしながら嬉しそうに駆けていく。走るの速いから追いつくのが大変なんだ。当然、力ではぼくよりララの方が強いから、リードを握るのはママの役目。

ララとママとぼくの吐く息が白い。「暦の上ではもう春なのよ」ってママは言うけど、まだまだ真冬だよ。それでも、最近暗くなるのが遅くなったかなあと思う。

いつものララお気に入りの場所でトイレをすませ、家に帰る途中近くの公園に寄った時、暗くなった公園のブランコに誰かが座っていた。ブランコはギィギィと小さな音を立てて静かに揺れている。地面につけた足を揺らしているだけで、漕いでいない。

誰だろう？　　と、ぼくはブランコの後付近寄ってみた。公園の外灯に照らされてセミロングの髪の女の人が見える。なんとなく、後ろ姿が寂しそう。もう少し近寄ってみて、ぼくは驚いた。麻美先生だ！？　　なんでこんな時間に公園にいるんだろう？　『ひみつの』彼にチョコレート渡して、今頃は二人でどっかに遊びに行ってるはずだと思った。

先生、どうしたのかな？　　ぼくは麻美先生のことになったから、ママとララに「ちょっと待ってて」と言っ、先生のところに走って行った。

「海斗くん？……」

いきなり正面に現れたぼくに気づき、麻美先生はビックリしていた。でも、ぼくはもっとビックリした。なぜなら、麻美先生の目から涙が溢れ出ていたから。先生なんで泣いてるんだろう??

「先生、どうしたの?」

何て言っているかわからなかった。先生はさっきまであんなに嬉しそうに笑ってたのに、今は顔中悲しみでいっぱいになってる。麻美先生は黙ってぼくを見つめた。なんとか笑顔になろうとしてるけど、どうしても笑えなくて代わりに涙が次から次へと流れていた。

しばらく黙って泣いた後、先生は両手で涙を拭ってバッグの中から包み紙を出した。

「……これ、海斗くんにあげるね」

赤いリボンで飾られた四角い箱。それってバレンタインのチョコレート?

「どうして? それ『ひみつ』の人にあげるんじゃないの?」

麻美先生はうつむいて首を横に振った。また涙がこみ上げてきたみたい。

「もういいのよ……その人には受け取ってもらえなかったから」

先生は小さな声でやっとそれだけ言った。そして、チョコの包みをぼくに差し出した。先生きつと振られちゃったんだ。片思いでバレンタインに打ち明けたけど断られたんだ。ぼくも女の子の告白をよく断る。断られた女の子はちよつとガッカリした顔するけど、すぐまた笑顔になって一緒に遊んだりもするようになる。

幼稚園児の付き合いつてそんなもんだもの。でも、大人はもっと複雑なんだね。断られたらものすごく落ち込んで泣いちゃって、なかなか笑顔になれないんだね。

先生の姿がとても小さく弱々しく見えた。

幼稚園で飼っているウサギのピョン太が死んじゃった時、ぼくは初めて人前で大声あげて泣いた。ピョン太はぼくによくついていて、毎日世話してやってた。かわいい弟みたいな奴だった。そのピ

ヨン太がある日突然死んじゃった。ぼくはぐったりしたピョン太をつかんだまま、なりふり構わず泣きわめいた。

その時、麻美先生は何もいわないでぼくの頭を優しく何度もなでてくれたんだ。泣き疲れて涙が出なくなるまでずっと側にいてくれた。そして、涙はかれたけどまだヒックヒックしゃくり上げてるおれを連れて、幼稚園の裏庭に行ってピョン太のお墓を作ってくれた。ピョン太を土の中に埋めて、木の十字架も立ててくれた。ぼくは今でも毎日ピョン太のお墓に行ってピョン太の大好きだったニンジンをお供えしてやってるんだ。

うつむいてブランコに座ってる先生の頭に、ぼくはそっと手をあてた。そして、「良い子、良い子」って優しくなでてあげた。ピョン太が死んだ時、先生がぼくにしてくれたように……。

麻美先生はゆっくり顔を上げてぼくを見た。

「海斗くん、ありがとう」

先生が微笑んだ。顔にはまだ涙のあとがあるけど、それでも嬉しそうな笑顔になった。ぼくもなんだか嬉しくなって笑った。

「先生、ぼくが大きくなったら麻美先生の恋人になってあげる」
半分冗談でそう言うと、ぼくは先生の隣りのブランコにちょこんと乗った。

「海斗くんが？　ほんとに？」

麻美先生の顔はマジで嬉しそうだった。

「うん、いいよ！」

調子に乗ってぼくは気やすく返事した。そして、勢いよくブランコを漕ぐ。

「先生、ブランコ漕いだら気持ち良いよ」

「海斗くん、約束ね」

麻美先生はブランコの鎖をしっかりとつかむと、大きく後にひいて漕ぎ出した。

「約束？」

ブランコで後に前に揺れながら、ぼくは先生の方を見る。

「そうよ、海斗くんが大人になったら先生の恋人になること」

麻美先生は子供みたいに笑った。ぼくと先生のブランコが交互に揺れて交差する。

「うん、約束！」

先生が真横に来た時、ぼくは元気よく返事した。

年上の恋人でもいいや。麻美先生のこと大好きだし。ぼくは楽しくなって笑った。

……でも、ちょっと待って、ぼくが大人になった時って麻美先生はいくつになってるんだろう？　ぼくのママは28才、もしかして麻美先生ってママより年上かも？……。

ま、いいか、そんなのずっと先のことだ。一抹の不安がよぎったけれど、ぼくは夜空に向かって勢いよくブランコを漕いだ。空にはたくさん星がまたたいている。ぼくと麻美先生は、夜空の星まで届くような笑い声をあげながら、ブランコを漕ぎ続けた。

完

後編（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

最初コメディのジャンルで投稿しましたが、やっぱり微妙だったのでその他に変更致しました。（^^;）コメディは難しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3736a/>

バレンタイン・デイ～先生との約束～

2010年10月8日15時44分発行